

株価分析の方法は大別するところ種類ある。一つはファンダメンタルシヤや証券アナリストなどが好むファンダメンタルズ分析である。企業の財務諸表分析を中心に業況状況も加味して分析してPER、PBR、ROEなどの指標も使い、株式の本質的価値と市場価格のギャップを計測することにより割安・割高を判断しようとする手法である。もう一つの方法は、トレーダーや個人投資家が好むテクニカル分析(チャート分析)である。チャート分析

実学の株式投資技術の必要性(16)

株価の方向性を予測しようとする手法である。単純な式で決まる。株価P

とどちらにも一長一短があるが、個人投資家・トレーダーが実践すべき方法は両者を3対7くらいの割合でブレンドした手法であると考ええる。株価は動くときは数カ月で5割以上下げたり上げたりすることも珍しくないため、ファンダメンタルズ分析だけで考えている判断が遅すぎる。しかし、株価は何の理論的根拠もなく下げ続けること、反対に上げ続けることもない。株価の上昇トレンドあるいは下降トレンドの裏には必ずその理由があるのだが、これはチャート分析だけでは決して分からない。チャート分析の「定石」は

単純だが強力な

「根本原理」



根幹 矢三 徳大 教授 知淑 徳大 教授 愛知 徳大 教授 三矢 徳大 教授

は株価の過去から現在までの変動パターンを分析・類型したある種の「定石」に基づき、これから少し先の

有効だが結果的に「たまし」となる場合も少なくない。ではどうすればチャート分析の精度をより高くできるだろうか。そもそも株価は将来の業績を先取りして動くものであり、マーケットが現時点で予想している将来の収益力、つまり「業績見通し」の「変化」が株価を動かすのであり、過去から現在までの既に確定してしまった過去の「事実」が株価を動かすのではない。では、株価はどのように決まるのか。それはとても

単純な式で決まる。株価P

である。この式はとても単純だが、とても強力な武器である。PERを一定と仮定すると、株価を動かすのは予想EPSの変化だけであるという極めて単純な「根本原理」を覚えてくれるからだ。日々の細かい上げ下げは需給の揺れやその他多くの雑音により起こるため予測不能である。しかし、業績見通し(予想EPS)が四半期ごとに改善しているならばその銘柄の株価はほぼ確実に上昇トレンドを描くはずである。反対に、業績見通し(予想EPS)が四半期ごとに悪化してきているならばその銘柄の株価はほぼ確実に下降トレンドを描くはずである。

これが株価の最重要理論である。

この理論に裏付けされた、目には見えないがそこにある罫子のようなトレンドを意識して、さらに25日移動平均線の傾きを根拠として「売り戦略」にするのか「買い戦略」にするのか「買い戦略」にするのかを決めるとチャートの「だまし」に振り回されなくなる。これが「理に適ったチャート・リーディング」である。「売り戦略」か「買い戦略」かの選択さえ間違わなければ最終的には必ず勝てる。ただ、戦略が同じであっても人によって利益の大小の差は生じるが、それは仕掛けと手仕舞いの仕方、つまり「建玉法」が異なるからである。

みつや・みきね コーポレートファイナンス・証券投資論・株式投資・トレード技術。元ドイツ銀行名古屋支店支配人。英国リーズ大学経営大学院・MBA(Finance)。1999年生まれ。